

『イワナの謎を追う』

石城謙吉著／岩波書店

『エッダ 古代北欧歌謡集』

谷口幸夫訳／新潮社

『アイスランド サガ』

谷口幸夫訳／新潮社

『ヘンリー4世 第1部、第2部』

シェイクスピア著、中野好夫訳／岩波書店

『ワイトゲンシュタイン全集1』

奥雅博訳／大修館書店

『ミリンダ王の問い インドとギリシャの対決〔全3巻〕』

中村元、早鳥鏡正訳／東洋文庫 7、15、28、平凡社

『ミリンダ王―仏教に帰依したギリシャ人』

森祖道、浪花宣明著／Century Books -人と思想、清水書院

かっこいいお姉さん

『イワナの謎を追う』

学生生活をしていたころ、よく大学の書店に行った。かなり大きな書店で、当然のことながら専門書が充実しており、一般書もかなり置かれていた（マンガは無かったと思う）。レイアウトは市内の書店と同様で、入り口のレジの近くに新刊やベストセラーを平積みしている台があり、常時大量の本が積まれていたと記憶している。店内を一回りしてめぼしい本が無かったので研究室へ帰ろうと出口へ向かったところ、トレンチコートを着た女性が平積み台の所で一冊の新書を手に取って見ていた。女性はタイトルと帯の文言を読むと、さっとレジへ行って支払いをし、本をショルダーバッグのポケットへすんと入れて店を出て行った。その一連の動作がスマートに決まっていたので（女性がクールビューティだったこともあり）、どんな本を買っていったのかと興味を持って自分も手に取ってみたのが標記の本だった。

北海道にはオシヨロコマとアメマスとよばれる2種類のイワナが生息している。この本はそれらの生態が互いにどのような関係にあるのかをフィールドワークを通じて明らかにしていたもので非常に面白かった。化学科に所属していた自分にとってはアウトドア系の研究の進め方は新鮮に感じた。読み進む内に中学生の頃、

小学校の同窓会で近郊の山に登り、その山中の小さな湖で友人がオショロコマを釣り上げたことを思い出した。この記憶と、オショロコマとアメマスは棲み分けをしており、オショロコマはアメマスの上ってこられない上流に棲んでいる、という本書の内容とが一致した。

サイボーグ009より

『エッタ 古代北欧歌謡集』

石ノ森章太郎氏の作品の「サイボーグ009」の中に「エッタ（北欧神話）編」というエピソードがある。009たちが北欧神話のような世界に迷い込み、神々の黄昏を体験するような内容だったが、自分にとっては内容そのものよりも、「北欧神話」と総称されるかなりのボリュームの物語が世の中に存在する、という事実の方が印象に残った。それからこつこつと情報を集め（当時インターネットはまだ存在していない）、標記の本のタイトルを知った。市内の書店には無いようだったので、就職活動で東京へ行く友人に頼んで八重洲のブックセンターで買ってきてもらった。多分、副題に問題があったのだろう、友人が言うには、本は音楽関連の棚にあったそうである。

叙事詩「ニーベルンゲンの歌」やワグナーの「ニーベルングの指輪」のような体系立ったものを期待したが、内容は断片的な短い説話の集合体だった。その中では特にヴァイキングたちの警句をまとめた「オーディンの箴言」（「性根のまがった哀れな男は、手当たり次第に何でも嘲る。自分にも欠けた点がないわけではないのを、知ればいいのに、それには気がつかない」とか、「友だちには友だちらしくして、贈り物には贈り物のお返しをすべきだ。笑いは笑いで、嘘は嘘でうけとめるべきだ。」とか）が気に入った。

後年、スウェーデンのウプサラを訪ねたとき、郷土博物館でシグルズ（ジークフリート）の竜退治の話である「ファーブニルの歌（エッタの説話の一つ）」を影絵芝居でやっていて、それをスウェーデン人の観客の中、ただ一人の日本人という状況で見る機会があった。スウェーデン語ができなくてもかかわらず内容が理解できたときには「古典」というものの意味と谷口幸夫氏の翻訳の正確さを思った。

そしてその後、ストックホルムで一番大きい書店に行き、店員に英語で『エッダ』はどこにありますか、と尋ねた（スウェーデンでは英語が良く通じる）。店員はすぐに筆者が日本人だと分かったようでちょっと驚いたように「日本語のですか？」ときいてきたが「いいえ、スウェーデン語のものをお願いします」と答えるとすぐに書棚の前へ案内してくれた（このやりとりを、場所を八重洲ブックセンターに、質問者を金髪碧眼のスウェーデン人に、エッダを古事記にして、日本語と英語を入れ換えて再生すると状況として結構笑えると思う《すみません、こじきハドコーニありますか？・・・》）。そのとき買った『エッダ (Eddan)』は今も筆者の書棚に宝物のように鎮座している。

食費を

『アイスランド サガ』

学生時代、週末は書店巡りをしていた。駅前通を南に歩くと大小7、8軒の本屋が点在しており、それぞれに特徴のある品揃えをしていた（現在ではその大半が閉店してしまっているらしいが.....）。ある日、JR駅から地下鉄一駅分南の書店に入ったときに標記の本を見つけた。学生にとっては高価で、普通は図書館かお金のことを気にしない好事家を買うものなのだろう。上記の『エッダ』を入手して以降、北欧神話関係の本を集めていた筆者にとってはどうしても手元に置きたい本であり、そしてこの機会を逃すと二度と手に入らなくなる本であることを直感した（発行部数は千部そこそこか?）。2週間くらい食費を削る覚悟をしてこの本を購入したが、その決断は間違っていなかったようだ。現在この本をネットで検索すると絶版になっており、中古が元値の数倍の値段で取引されている。

内容は、ヴァイキングたちの一代記やいろいろな一族の物語で、それぞれかなりボリュームがある。巻頭に収録されている「エギルのサガ」にはエギルという名のアイスランド生まれの一人のヴァイキングを中心に彼の祖父から息子達までの物語が描かれている。ノルウェーを統一したハラルド美髪王に戦士として仕えながら最後は敵対してしまった伯父ソーロールブ、やはり王と対立してアイスランドへの移住を決断した祖父クヴェルドウールヴと父スカラグリーム、そして主

人公である戦士にして詩人のエギル。このサガでは彼らの生き方とともにヴァイキング時代（9世紀から11世紀ころ）の北海を取り巻く国々の事情がよく判る（文章はかなりタリイ）。「ヴォルスンガサガ」はオーディン（北欧神話の主神）の孫のヴォルスンとその子孫達の物語でやがて英雄ジークフリートの誕生へとつながる。当時日本語でヴォルスンガサガを読めて購入可能なのはこの本しか無かったはずだ。ヴォルスンガサガのスウェーデン語版は二十年後ストックホルム訪問時に歴史博物館の売店で購入することができた。

総じてヴァイキングたち（武装農場主にして“強行貿易”を行う航海者）のprimitiveなメンタリティが印象的だった。この本を読みヴァイキングのことを知った後、「ヴァイキング」を安易に「海賊」と訳している文章を見ると、それはちょっと違う、と思ってしまう。

デートのときに

『ヘンリー4世』

学生時代、デートの待ち合わせ場所を、地下街コンコースの地下鉄南改札口前、としたことがあった。約束の時間より早く着き、少し時間をもてあましたので本でも見るかとすぐ横の本屋に入った。最初SFの新刊を探したが、ここでちょっとしたイタズラを思いつき文庫本を一冊買って待ち合わせ場所に戻った。当時はずいぶんSFを読んでおり、彼女にもそんな話をしてきた。彼女がやってきて本を読んでいる筆者を見ると開口一番「SF？」ときいてきた。それに対し自分は澄ました顔で「シェイクスピア」と答えた。彼女は一瞬唖然とした表情をしたが、頭の回転の速い女性だったのですぐにこれが筆者の仕込みだと気づき、顔をクシャッとさせて笑った。

この作品にはヘンリー4世の王太子（後のヘンリー5世）の悪友としてサー・フォルスタッフが登場する。イギリスのトリックスターの原型なのだろう。非常に破天荒な人間ながら現在でも大変人気があると聞く。日本の文学では対応する人物を探すのは難しいようだ（日本人はまじめすぎる）。16世紀の英国の戯曲が21世紀（筆者が読んだのは20世紀だけど）の日本で読まれている。これはシェイクスピア

の作品が時と国境を越えて生き残るだけの普遍的な価値（面白い！）を持っている証拠だろう。シェイクスピアの著作は娯楽作品である。別に堅くもなともなく人間くさくてむしろ柔らかい（ちょっと訳本の言葉が古くさいが）。

イタズラに使った本はその後面白く読んで、今も筆者の書庫にある。

先輩のこと

『ワイトゲンシュタイン全集1』

学生時代に所属していた研究室の2期先輩にSさんという人がいた。博覧強記の読書家かつディレクターでいろいろなことを教えてもらった。その内容は勉強から、酒、遊びに及び、研究室の大テーブルでぶっ続け六時間以上明け方までジュットランド海戦（シミュレーションウォーゲーム：差し渡し1mほどの六角形の「戦闘海域」に英独の戦艦を描いた駒を数十枚配置して艦隊運動をさせつつ砲火を交換し、サイコロで損害を判定する）を戦ったのは良い思い出。そのSさんが学位をとり、研究室を離れるに当たって、処分が面倒くさかったのだろう、好きにしろ、といって大量の本を研究室に置いていった。筆者を含む後輩らはそれぞれに面白そうだと思う本を貰い、残りは古本屋に売って飲み会の資金にした。そのとき貰った中の一冊が標記の本である。

この第一巻は「論理哲学論考」という前半部分と「草稿」を集めた後半部分から成っており、「論理哲学論考」では“哲学的諸問題”を論理的に取り扱うための“定義”や“定理”をユークリッド原論のように列挙していつている（証明は書いて無いが）。曰く、「1 世界とは実情であることがらの全てである」とか。万人に分かる教科書では無い、とは著者も書いているが、これで論理世界は構築できるのだろうか。若くていろいろと悩んでいる年頃だったら、そのさも意味ありげな文言にはまってしまっていたかもしれない。ただ、「論考」にも「草稿」にも「神」という単語が入り込んでおり、少し興が削がれた。キリスト教文化圏の哲学では致し方ないのかもしれないが。

本当に難しい本

『ミリンダ王の問い インドとギリシャの対決』

大学院生の頃、学位論文の研究とは別に宗教やら神話やらに興味を持って本を読んでいたことがある（現実逃避ともいう）。そんな中、インド哲学とギリシャ哲学の出会い、とかいうキャッチコピーを持つこの本の存在を知った。

以前、研究に必要なため学生に分子軌道法の本を読ませたが、難しい、難しいと不平をいうので、本当に難しいというのはこういう本のことをいうのだ、と標記の本を貸してやったことがある。学生は読もうとしてその難しさに凹んでいた。

紀元前4世紀、マケドニアのアレクサンドロス大王がアジアへの大遠征を行った。宿敵ペルシャ帝国を倒した後も東征を続け、最終的にはインダス河流域まで到達した。その過程で各地に植民都市アレクサンドリアを建設し、部下には現地女性との結婚を奨励して彼の帝国の一体化と維持を図ろうとしたが、彼の早すぎる死後、その大帝国は分裂してしまう。分裂のどさくさの後、東方で生き残った植民都市がグレコ・バクトリア王朝（アフガニスタンあたり）やインド・ギリク王朝（パキスタン北部あたり）として自立した。ミリンダ王とは、紀元前2世紀頃のインド・ギリク王朝の王メナンドロス1世のことである。

ギリシャ的バックグラウンドを持つ王はインドの賢者とよばれる者達に形而上学的問いを発するが、満足する答えが得られず仏教に対し否定的な考えを持っていた。その王が尊者ナーガセーナの存在を知って、500人のギリシャ人を引き連れて会いに行き、「いかにして、あなたは尊師として知られているのですか？尊者よ、あなたはなんとという名なのですか？」という問いから問答を始める。尊者は例を挙げつつ次々と問いに答えていき、262の問い（伝わっていない問いを加えると304）に答えが与えられると、王は感服し仏教に帰依した。要するに問答の形を取った仏教哲学の経典である。

問いと、それに対する答えが与えられても、理解する、ということとは別物だということがよくわかる（この本の中でデカルトの「吾思う故に吾あり」が思い切り否定されているということ）を解説書『ミリンダ王—仏教に帰依したギリシャ

人』を最近になって読んでようやく知った)。筆者自身、全部を読み通して理解するだけの情熱と知的体力は持っていなかったが、今本を開いてみると、所々に印がつけてあり、それらは最初に読んだときに納得した、或いは印象に残った問答だったと記憶している。

追記：研究室で「この本は難しい」と紹介したところ、学生らが興味を持ち図書館から借りてきて読んでいます。さて、彼らは理解するだろうか。

執筆者紹介

内田 希

物質材料工学専攻准教授。専門領域は、無機化学、計算機化学、熱化学。

『書名』 著者名 翻訳者名 出版社または文庫・シリーズ名 出版年 税込価格

『イワナの謎を追う』 石城謙吉著 岩波書店 岩波新書 1984年 品切

『エッダ：古代北欧歌謡集』 V. G. Neckelほか編 谷口幸男訳 新潮社 1973年 2,808円

『アイスランド サガ』 谷口幸男訳 新潮社 1979年 品切

『ヘンリー 4世 第1部・第2部』 William Shakespeare著 中野好夫訳 岩波書店(岩波文庫) 1969-1970年 品切

『ウイトゲンシュタイン全集 1 - 論理哲学論考/草稿1914-1916/論理形式について』 L. Wittgenstein著 奥雅博訳 大修館書店 1975年 4,320円

『ミリンダ王の問い：インドとギリシアの対決 [全3巻]』 中村元、早島鏡正訳 平凡社(東洋文庫) 1963-1964年 2,700-3,132円

『ミリンダ王：仏教に帰依したギリシャ人』 森祖道、浪花宣明著 清水書院 1998年 918円

[ブックガイド目次へ](#)